

ポップ カン マイ
Phob kan mai

ルン カーオ
Lum Khaow !

平成11年度

第8回鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 北方 都志信

(青年海外協力隊鹿児島県OB会会長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は今回で8回目を迎え、ここに報告書『Phob kan mai Lum Khaow! 「ポップカンマイルンカーオ」(また会いましょうルンカーオ)』をとりまとめました。

この事業は、青年海外協力隊の活動現場に青少年を派遣し、開発途上国で顔の見える草の根運動の国際協力を実践している隊員の活動を一緒に体験するとともに、訪問国の人々との交流を通して、国際交流・国際協力に対する理解を深め、国際性豊かな青少年の育成を目的としています。

今回は、鹿児島市、指宿市、加世田市、喜入町、笠沙町、知覧町との共催で実施しました。各市町から推薦された9名(中学生2名、高校生7名)と同行者5名(内2名がマスコミ)で、平成11年7月30日～8月5日、タイ国のバンコク、アユタヤ、ロブリー、ルンカーオ村を訪問しました。タイの総人口は1998年の推計で6,130万人、日本のおよそ半分で、80%がタイ族、10%が華僑、あとの10%がマレー族や山岳少数民族などです。国土面積は51万4000km²で、日本のおよそ1.4倍あり、象の形に似ていると言われています。ホームステイ先となったルンカーオ村は、首都バンコクから北へ車で3時間ほど走ったところにあり、その途中にアユタヤ遺跡や、隊員のいるロブリー市があります。

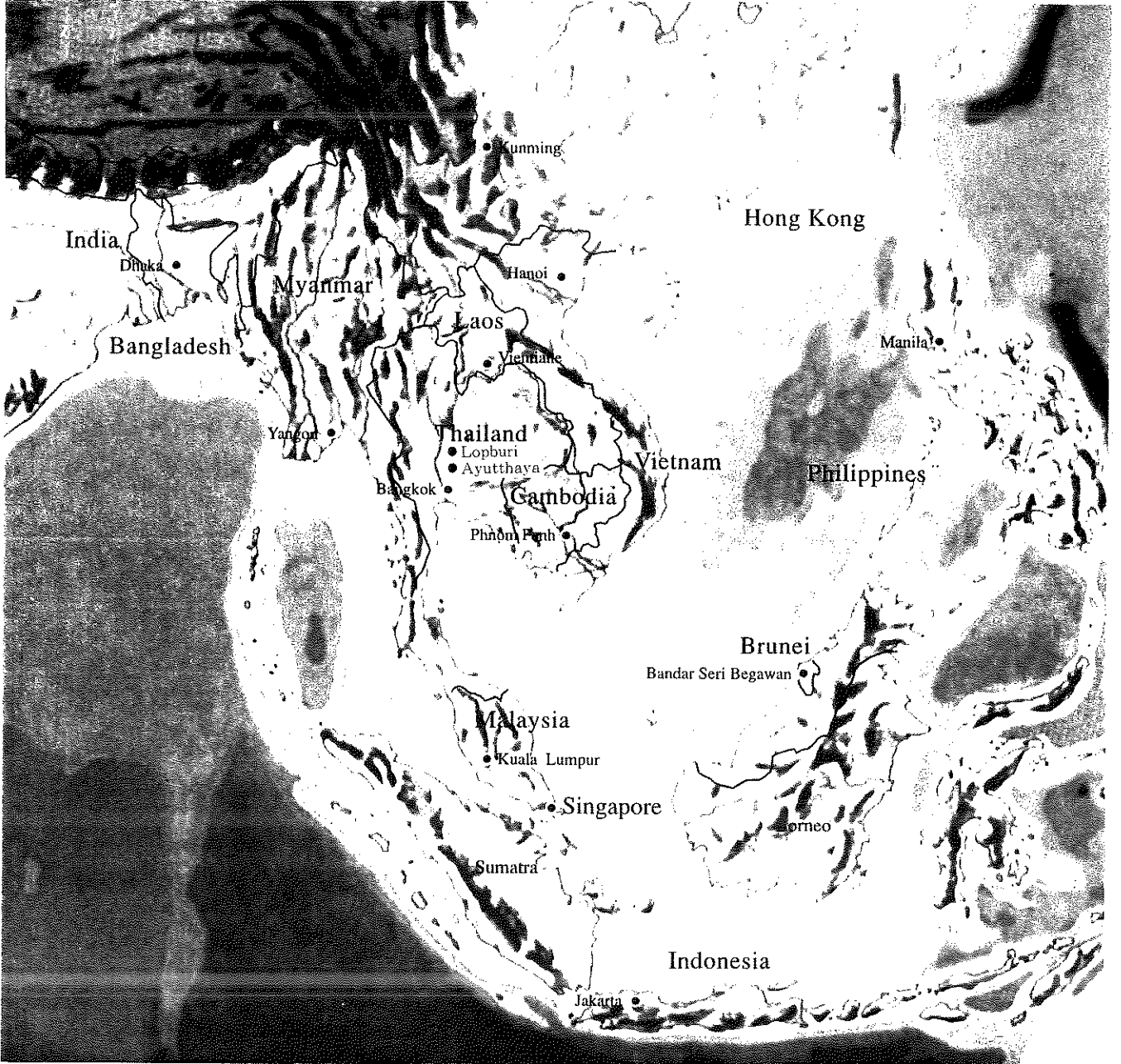
ルンカーオ村の人々は、タイ族とは若干異なる文化や言葉を持つラオス系の少数民族で、プアン族と呼ばれています。プアン族と仏教の結びつきも強く、タイ族と同じ上座部仏教を信仰しています。各集落には必ずお寺があり、お寺は人々が僧侶の教えを請いにやってくる教育の場であり、憩いの場であり、また社交の場でもあり、人々の厚い信仰心によって支えられています。

現在の世界は、相互依存関係が深まる一方で、地球温暖化、酸性雨、自然災害による被災者の救援、難民問題等、さまざまな地球規模の問題をかかえています。これらの問題は私たちの日々の暮らしとも密接に関わっています。私達1人1人が「地球市民」として共に考え、行動することが求められています。

今回の参加者達が、この貴重な体験を鹿児島のため、そして地球のために活かして欲しいと願っています。また、参加した青少年だけでなく、できるだけ多くの方々に彼らの新鮮な感動を伝え、共有してもらうことによって、鹿児島県の国際化に貢献できればと考えております。

最後にこの事業にご協力を賜りました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

タイ概略図



目 次

◆ はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 北方 都志信

◆ タイ概略図

◆ ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長 片 平 芳 美 1

◆ 事業概要

事業の趣旨, 事業主体 2

訪問団員名簿 3

訪問日程 4

行動の記録 5

◆ 団員報告

青少年国際協力体験事業を通して 福 富 晴 夏 11

微笑みの国を訪ねて 大 窪 綾 12

青少年国際協力体験事業に参加して 南 谷 友 13

タイでの体験を通して 前之園 やよい 14

タイを訪れて 上 釜 理 沙 15

タイの国で得たもの 西 佳 乃 16

夢さがしの旅 村 方 直 己 17

青少年国際協力体験事業に参加して 西 野 健太郎 18

タイでの体験日記 大 迫 恭 美 20

◆ 第8回鹿児島県青少年国際協力体験事業を終えて

団 長 弓 場 秋 信 22

◆ ルンカーオ村ホームステイ先配置図 23

◆ 事業関連のスナップ写真 24

◆ 事業関連の新聞記事 27

◆ わたしたちが覚えたタイ語 33

◆ 同行者一口メモ 34

ご あ い さ つ

鹿児島県総務部国際交流課長

片 平 芳 美

平成11年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、今回で8回目を迎えますが、本県の21世紀を担う青少年を青年海外協力隊の活動現場に派遣し、開発途上国の人々の新しい国づくりに協力している隊員と一緒に実際の活動を体験するとともに、ホームステイにより派遣国の皆さんと生活を共にしながら、相互の生活、習慣、文化等を理解することを目的として、他県に先駆けて始められ、各方面からも大きな注目を浴びています。

今回は、初めてタイを訪問し、青年海外協力隊の活動現場を訪問したり、農村でのホームステイやボランティア活動、スポーツ交流など、地元の人たちとの交流によって異文化を体験し、国際交流や国際協力に対する理解を深めることができたことと思います。

参加された皆様の御報告をお聞きしますと、純真な気持ちと溢れる情熱を持ち、言語、生活様式、習慣、文化の壁を乗り越えることができる積極的で国際性豊かな青少年が、着実に育っていることを実感いたします。今後、この貴重な経験をこれからの人生に活かしていただけるものと思っております。

鹿児島県は、現在、青年海外協力隊の支援、海外技術研修青年等の受け入れ、青少年の海外派遣、香港、シンガポール及び韓国全羅北道との交流会議の開催や中国江蘇省との交流など様々な事業を実施しており、「アジアを中心にした世界に開かれた南の交流拠点」の形成を目指し、様々な交流を積極的に推進してまいります。

最後に、この事業を実施された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会及びこの事業の実施に当たり御支援・御協力をいただいた国際協力事業団並びに青年海外協力隊の皆さんに心から敬意を表しますとともに、この事業の今後一層の充実、御発展を祈念いたします。

事業概要

(事業の趣旨)

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

(事業主体)

- 主催** 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
＜構成団体＞
青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
(財)鹿児島県国際交流協会
- 共催** 鹿児島市，指宿市，加世田市，喜入町，笠沙町，知覧町
- 協賛** (財)古謝育英会
- 後援** 国際協力事業団九州国際センター，鹿児島県，鹿児島県教育委員会
- 協力** タイ大使館

訪 問 団 員 名 簿

● 訪問団員（青少年）9名

氏 名	学 校 名	学 年	推 薦 自 治 体
ふくとみ はるか 福 富 晴 夏	鹿児島女子高等学校	3年	鹿 児 島 市
おおくぼ あや 大 窪 綾	鹿児島玉龍高等学校	2年	鹿 児 島 市
みなみに とも 南 谷 友	鹿児島玉龍高等学校	1年	鹿 児 島 市
まえのその やよい 前之園 やよい	指宿高等学校	2年	指 宿 市
かみがま りさ 上 釜 理 沙	加世田常潤高等学校	2年	加 世 田 市
にし よしの 西 佳 乃	鹿児島中央高等学校	1年	喜 入 町
おおさこ きょうみ 大 迫 恭 美	笠沙高等学校	2年	笠 沙 町
にしの けんたろう 西 野 健 太 郎	知覧中学校	3年	知 覧 町
むらかた なおみ 村 方 直 己	知覧中学校	3年	知 覧 町

● 訪問団員（同行者）5名

氏 名	所 属	備 考
ゆみば あきのぶ 弓 場 秋 信	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会	団 長
つかだ たく 塚 田 拓	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
たはら なおこ 田 原 尚 子	(財)鹿児島県国際交流協会	
まえだ よしと 前 田 義 人	(株)南日本新聞社	
かばやま みきこ 樺 山 美 貴 子	(株)KKB鹿児島放送	

訪 問 日 程

- 訪問国：タイ（訪問地—バンコク、ルンカーオ、ロップリー、アユタヤ）
- 期 間：7月30日（金）～8月5日（木）
- ホームステイ先：ロップリー県コーサムローン郡ルンカーオ村
- スケジュール

月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月30日	金	空港集合 結団式 鹿児島 香港 香港 バンコク	08:45 09:30 11:05 13:10 15:25 19:00	JL755 JL731 専用バス	・鹿児島国際空港ターミナル集合 ・国際ターミナル特別待合室	ホテル
7月31日	土	バンコク アユタヤ ルンカーオ	09:00 11:00 18:00	専用バス	・オリエンテーション (TVS) ・アユタヤ遺跡見学 ・ホストファミリー対面式	ホームステイ
8月1日	日	ルンカーオ	終 日	専用バス	・村内の交流・協力活動 タイ文化体験 換金作物プロジェクト 伝統工芸見学 スポーツ交流	ホームステイ
8月2日	月	ルンカーオ ロップリー ルンカーオ	08:00 10:00 14:30	専用バス	・ラチャパット大学訪問 青年海外協力隊員（園田隊員/ 日本語教師）の活動視察 生徒との交流 ・村の学校を訪問 レクレーション ・タイのデザートづくり	ホームステイ
8月3日	火	ルンカーオ ロップリー ルンカーオ	08:00 10:00 15:30	専用バス	・養護学校訪問 青年海外協力隊員（上野隊員/ 養護教諭）の活動視察 ・日本料理紹介など ・フェアウェルパーティー	ホームステイ
8月4日	水	ルンカーオ バンコク	08:00 11:00	専用バス	・JICA タイ事務所表敬訪問 ・タイ市内観光, 反省会など	ホテル
8月5日	木	バンコク 香港 香港 鹿児島	08:40 12:25 14:35 18:00	J L 702 J L 756	(移動日) 解散	

行動の記録

● 7月30日（金）

○ 結団式（鹿児島空港国際線ターミナル1FグループラウンジA, B）

- ・ 激励（鹿児島県国際交流課長 片平 芳美）
（鹿児島市国際交流課主幹 松澤 茂）
（(財)国際交流協会専務理事 北田 定雄）
- ・ 団員あいさつ（1人ずつ参加の動機と抱負を発表、簡単なタイ語も披露）

○ 鹿児島空港発（新香港国際空港経由）

家族の見守る中、期待と不安を胸にタイへ出発。
現地で披露するけん玉を練習する団員もいた。

○ バンコク国際空港到着

約5時間のフライト後、バンコク国際空港へ到着。バンコク市内を移動中大渋滞に遭い、東洋の大都会バンコクを実感した。

（ホテル宿泊）



● 7月31日（土）

○ TVS (Thai Volunteer Service) 訪問

タイでのボランティアの現状や、これからのボランティアのあり方についての意見を聞く。

○ 「アユタヤ遺跡」等見学

世界遺産であるアユタヤ、王室公園などタイの文化や歴史に触れる。

○ ルンカーオ村へ到着

・ルンカーオ村の村長さんや地区長さんのあいさつをはじめ、盛大な歓迎を受ける。旅の安全祈願の儀式で右手首に白いひもを巻かれたが、中には十数本巻かれた生徒もいた。

・ホストファミリーとの対面式

9名の生徒、同行者5名がそれぞれホストファミリーと対面。1人ずつ名前が呼ばれ、村人の見守る中、握手をしたり、肩をたたき合ったり、抱き合ったりした。皆で一緒に集会所で夕食を済ませたあと、車やトラックで各家庭へ分かれて行った。

(ホームステイ)



● 8月1日（日）

○ 午前中、ホストファミリーと過ごす

一夜明けて、日曜日の朝。お寺へのお参りの日である。タンブン（徳を積む）と呼ばれる行事で、子供たちが並んで持っているかめの中に、緊張しながらごはんとお菓子を入れる。僧侶優先の社会なので、朝食はお供えの残りを我々一般庶民が食べる。

○ 午後は村内の見学、青少年との交流

- ・ ルンカーオ村は人口約3,000人、およそ650世帯。ルンカーオとは“お米のとれる盆地”という意味で、村の主用作物は米である。また、竹林も多くタケノコの産地でもあった。
- ・ 農業以外の収入を得るための換金作物プロジェクトが取り組まれている場所を見学。“マットミー”と呼ばれる伝統的な綿織物をつくっている機織り工場、普段わたしたちが荷造りなどに使うプラスチックのひもを編んで作るバスケットづくりやロウソクづくりをしているところ、うどん工場などである。
- ・ 夜は“カオラーム”と呼ばれる伝統的なお菓子（竹筒にもち米とココナッツミルク・砂糖を入れて火であぶる）を食べた。また、かかしに洋服を着せたような不思議な人形を使った占いの儀式を見せてもらった。

（ホームステイ）



● 8月2日（月）

○ ラチャット大学テープサトリ校訪問(園田智子隊員)

- ・日本語を教えている園田隊員の授業を見学させてもらったあと、文化交流(日本舞踊、書道など)をした。
- ・学生達に学内と学生食堂を案内してもらった。はじめて協力隊員の活動現場に立ち会ってみて、想像以上に生き活きと楽しそうに、しかも堂々と指導に臨んでいる姿を見て憧れを抱く。

○ ルンカーオ小学校訪問

- ・スライド等で学校の紹介をもらった。
- ・レクリエーション交流として、日本側は『だるまさんがころんだ』、タイ側は『ハンカチ落とし?』『ロンドン橋』をすることになり、皆童心に帰ってはしゃいだ。またスポーツ交流では、バレーボール、バスケットボール、セパタクロ、卓球などを日が暮れるまで楽しんだ。

(ホームステイ)



● 8月3日（火）

○ ロッブリー特別養護学校訪問（上野未奈隊員）

主に知的障害児と聴覚障害児の教育を行っている養護学校を訪問し、知的障害児の音楽の授業を見学させてもらった。わたしたちも、行き帰りのバスの中で練習したりコーダーに合わせてみんなで合唱した。普段接することの少ない障害児との交流は、とても印象的に残った。みんな元気で明るく、目が輝いていた。やはり上野隊員も楽しそうで、優しい温かい目を子供たちに注いでいた。

またこの日は寄付者への感謝祭の日でもあり、講堂の舞台上で聴覚障害児の子供たちが手話による歌を披露してくれたのも感動的であった。我々も特別参加として、日本舞踊や小原節を踊った。

○ 日本食づくり

タイ米ともち米を混ぜて作ったおにぎり、煮干しと椎茸で作ったすまし汁、大きなフライパンで作った卵焼き。皆で分担して一生懸命つくった。

○ お別れパーティー

・集会所で最後の夕食。わたしたちが丹精込めてつくった日本食も並べられた。がしかし……おにぎりはほとんど食べてもらえなかった。左手は不浄な手と考えられており、不浄な左手が直接触れてつくった食べ物だからだそうだ。すまし汁はわたしたちにとってはたいへんおいしかったのだが、村人たちはにっこりと笑いながらも、おかわりをしようとはしなかった。卵焼きに関してはわれわれのところには回ってこなかったのが反応は分からない。

・ホームステイの感想発表やホストファミリーとのメッセージの交換のあと、日本舞踊、けん玉、書道、空手、笛・歌、最後に小原節、そして、プアン族の踊り。見よう見まねの踊りの輪が広がり、最後の夜を過ごした。

（ホームステイ）



● 8月4日（水）

○ ホストファミリーとのお別れ

別れの朝。村の僧侶に旅の無事を祈願してもらい、4泊5日のホームステイは終わった。団員やホストファミリーだけでなく、村人みんなが別れを惜しみ、目頭を押さえていた。バスの中から必死で手を振った。

○ 国際協力事業団タイ事務所を表敬訪問

鷺見佳高次長からタイでの協力活動の現状等を聞かせてもらい、団員からは協力隊員の活動現場の視察の感想を発表した。

○ バンコク市内見学

（ホテル泊）

● 8月5日（木）

○ バンコク空港発

○ 新香港国際空港経由鹿児島空港着



青少年国際協力体験事業を通して

福 富 晴 夏

(鹿児島女子高等学校3年)



私は今回「青少年国際協力体験事業」で、日本と言葉も生活のスタイルも、文化も違うタイへ行くことができた。1週間という短い期間ではあったが、タイでのホームステイや青年海外協力隊員活動現場への訪問などを通して、多くのことを学んだ。

村でのホームステイは初めて経験することばかりで戸惑うことが多かった。村に着いてまず感じたのは、言葉の壁の厚さだった。事前研修でタイ語を勉強したとはいえ、自分で言えるのはあいさつ程度。本を使っただけの会話は全く進まず、周りの人達とコミュニケーションをとるのには、ほとんど無力だった。

また、今回一番困ったことは、トイレと水浴びだった。お風呂と言われて入ったところには水がためただけ。バスタブもない。お湯も出ない。「これがタイなんだ」と自分に気合いを入れて水浴びを試みたが、抵抗なく水浴びをすることができたのはホームステイ最後の夜だった。

青年海外協力隊の活動現場で2人の隊員の方々に会い、応募したきっかけやタイでの活動内容などの話を聞いた。説明のときには大変だと言っていたが、授業をしているときは本当に大変なんだろうかと思うほど、楽しそうに生き生きしていた。私は今回協力隊員を訪問するまで、協力隊員はボランティアを

しているとはばかり思っていたが、実際は2人とも海外に興味があり応募して、ボランティアということ意識していないことに少し驚いた。また、日本語教師の園田さんから、国際交流というものは地道なもので、お互いの国に興味を持つことから始まる、という話を聞いて、自分にできることからでも国際交流や協力は始められると思った。今回、青年海外協力隊というものを知ったことにより、1つ何か技術や才能などがあれば、自分のできることの幅が広がり、いろいろな世界を知ることができるのだと、改めて思った。

私は今回タイに行ったことで、多くのものを得ることができた。異文化に触れることで、言葉がどれだけ大切なものか分かった。文化の違いから考え方が大きく違ってくることも知った。また、外から日本を見ることができ、日本での生活がどれだけぜいたくであったかも分かった。今回得たものはどれも、日本にいて得ることはできなかったものばかりだ。その中でも一番大きかったものは、たくさんのお会いだった。ホストファミリーや村の人々、協力隊員や子供達との出会い。そしてこの事業に参加した8人の仲間達との出会い。どの出会いも私にとって大切なもので、決して忘れることはないだろう。

この事業に参加したことで、今まで見えなかった自分を知ることができた。今はまだ具体的に何がしたいのか分からないが、これから進路決定をする上で、この経験は大きな影響を与えると思う。ただ、確実にひとつ確信できることは、何を成すにも人と人との関わりは、相手をおもいやる心が大切であるということだ。

最後に、このような機会を与えていただいたこと、貴重な体験ができたことを感謝したい。

微笑の国を訪ねて

大 窪 綾

(鹿児島玉龍高等学校2年)



2回の研修を経た後、タイへ出発。タイでの生活に期待と不安がいっぱいバンコクに着くまで落ちていたことができなかった。

バンコクに着き私はとても驚いた。町中の明かりが暗く、車のブレーキランプがやけに目立っていた。そして大きなビルの下を見ればスラム街。川は濁り、ごみの山。最初から日本との大きな違いを目のあたりにし、途上国の現状というものを知ったような気がした。

今まで私がしてきた国際協力は、人に物やお金を寄付する協力だった。寄付された人達はそれで助けられているから役立っているであろう、という今までの考えを少し変えさせられた2人の青年海外協力隊員に出会った。日本語教師と養護教師という2人の隊員の授業と話を通して、国際協力とは夢を与える仕事なんだと思った。途上国の人々が将来自分達の手で援助を受けなくてすむ国を作るために手をさしのべている、途上国の人々を成長させているという印象を受けた。そして、先進国と途上国、両方の意識改革も必要というのが分かった。

ホームステイ先で私は、生活習慣の違いに常に戸惑っていた。初めての夜、水浴びの仕方が分からず、髪を洗うことができなかった。

さすがに日本に帰りたくなった。水浴び、トイレ、歯みがきの水、すべてが同じように濁った水だった。初めは見るのも嫌だったが慣れてくると水浴びも気持ちよくなり、歯みがきも抵抗なくしていた。この村の人達は普通に生活できているから、私にもできるはずだと思うようになった時、日本での贅沢な暮らしをしていたことを恥ずかしくも思った。

そして日本での生活、先進国の生活が当たり前と思う必要はないと感じた。ホストファミリーや村のみんなとうまく会話ができなくて、言葉の壁の厚さも感じてはいたが、身振りで一生懸命伝えようとしてくれる姿を見るところれしくなり、それに応えるように私も本で単語を組み合わせてながら話すことで、うまくコミュニケーションをとることができた。家族はみんな親切で、私が軽い貧血になった時もお母さんはずっと側についてくれて、自分がいつも身に付けている仏様のバッジを、早くよくなるようにと私に付けてくれて、いつも気遣ってくれたことにとても感激した。

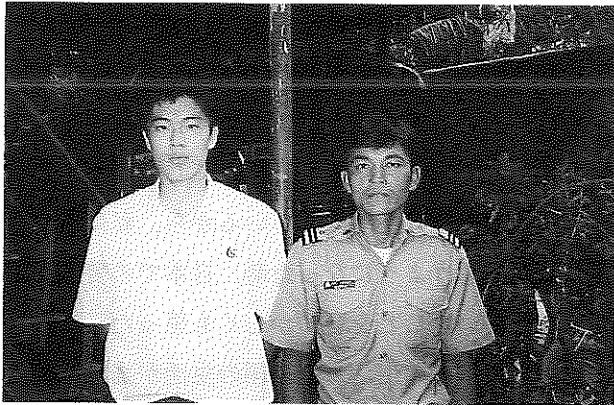
村を歩くと知らない人も笑顔であいさつをしてくれ、微笑の国でたくさんの笑顔とやさしさ、温かさを感じて贅沢なほどうれしかった。

2人の協力隊員は、海外に興味があったのをきっかけに協力隊員になっている。今回の事業では、タイをいろんな角度から見ることができたが、もっとたくさんの物や人、国を見て私のできることを探していきたい。そして協力隊員としていつか世界で働きたい。いろんな事を吸収して今までよりも確実に大きくなった自分と仲間。また同じメンバーでルンカーオ村の家族の元へ帰りたい。これまでの出会い、経験のすべてが、心の中でいつも私達を励ましてくれることだろう。

青少年国際協力体験事業に参加して

南 谷 友

(鹿児島玉龍高等学校1年)



僕はタイに着いて2日目、初めてタイの壁にぶつかった。それは「言葉」という壁だった。僕はあまりタイ語を練習していなかったせいで、村の人達が何を言っているのか全々分からなかったのだ。だからホームステイ先の両親が何か言っているときも、ただうなずくだけだった。

友達は、家族や近くの人達で英語を話せる人がいたけれど、僕の周りにはいなかったのでも困ったのを今でも覚えている。困っていた僕にホームステイ先の両親は、僕の持っていたタイ語のテキスト帳をとって親切に指さして教えてくれた。そのおかげで少しずつだけタイ語を自分のものにすることができた。

3日目の夕方、村の子供達とのスポーツ交流会が行われた。僕は西野君と一緒にバスケットボールをした。相変わらずタイ語は全然できなかったけど、とても楽しい時間を過ごすことができた。

4日目はラチャバット大学で日本語を教えている園田隊員、5日目は養護学校に勤める上野隊員、2人の協力隊員の活動現場を見学した。2人とも自分の仕事に誇りを持っていて、とても生き生きしていた。僕は自分の仕事に誇りを持っている協力隊員が

とてもうらやましくて、自分も将来誇りを持てるような仕事に就きたいと思った。

6日目の朝。村を出発する時、最初みんなが泣いているのを見てとてもうらやましく思えた。と、同時にみんなが泣いている時にのんきに笑っていた自分がとても嫌に思えた。たぶんそれは、頭の中に「最後」という言葉が浮かんでこなかったからかもしれない。だけど写真を撮った後すぐに涙があふれてきた。

今回僕はこの研修で「ボランティアという言葉は知らない」ということを学んだ。何故なら意識してするボランティアなど本当のボランティアではないからだ。本当のボランティアとは「人のために自分が今できることをする」ことだと思う。日本人達は「ボランティア」を意識してやっているが、タイの人達は意識せずにやっている。だから僕は、「ボランティア」という言葉は知らないことを学ぶことができた。

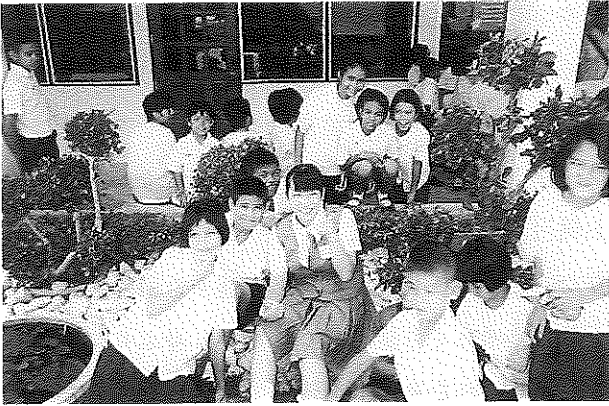
長いようで短かった1週間のこの体験。もう僕はこの体験事業に選ばれることはないかもしれないけれど、この体験で学んだことを将来生かすことができればとてもうれしいことだと思う。

そしてまた機会があれば、今回一緒にに行った9人のメンバーでどこかへ行けたら、とても楽しい旅行になりそうなので行ってみたい。

タイでの体験を通して

前之園 やよい

(指宿高等学校2年)



私は、外国に興味があり、青年海外協力隊の活動現場を見たいと思い、今回「青少年国際協力体験事業」に参加しました。

まず、2人の青年海外協力隊員を訪ねて、共通しと言える事は、2人とも仕事内容は忙しくハードだったけれど、生徒に信頼され、とても生き生きと活動していて輝いて見えたという事です。

日本語教師の園田さんは指宿高校出身であり私の先輩であったためか、青年海外協力隊が身近な存在に思えてきました。また、生徒と友達になり日本の印象を聞きました。やはり、「金持ち」「豊か」という声が多く、日本のアニメや歌手がタイでも流行っていて日本が外国に及ぼす影響が大きい事を知りました。

そして、養護教師の上野さんの話では、タイでは障害児に対する意識が低く、目も向けられない状況にあり、教育は今始まったばかりである事を知りました。養護学校のとても人懐こい子供達を見て、早く解決して欲しい問題だと思いました。そして、私も自分なりに勉強してこの様な仕事に携わりたいです。

私は村にホームステイし、異文化を体験できた事

が一番心に残っています。村はみんな家族の様に仲が良く、私達もその輪の中に入れてくれるかの様に歓迎し、仲良くしてくれた事には驚き、そして感激しました。ホストファミリーとのコミュニケーションには苦勞したけど、私の意志を一生懸命に理解しようとし、笑顔で答えてくれた事に、大変感謝しています。村人はいつも笑顔で接してくれました。そんな温かく心豊かな人々と触れ合ううちに、私も現地の方式を受け入れられ、積極的に交流しようという気持ちになっていました。トイレや、暗闇で冷たい水に寒がりながらやった水浴び、食事など、この村でしか味わえない事ができたのは貴重な体験でした。

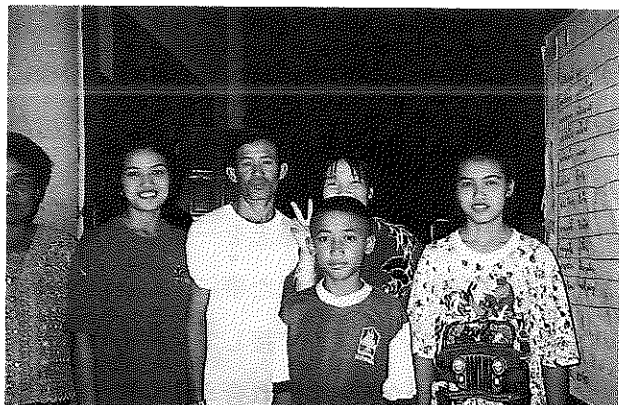
こんなに素敵な人々との別れは、つらく、涙が溢れて止まりませんでした。そして、またこの村に來たいと思いました。でも今の私は役に立てないから、今度來る時は、人の役に立つ技術を身につけて來たいと思います。今回、この事業に参加し、数え切れない程、多く貴重な出会いがありました。この出会いを一生大切にしたいです。そして、異文化に触れてみて、外国に興味はあったものの、まだまだ勉強不足で知識はほとんどなく、未知の世界が多く存在している事を思い知らされました。でも、この事業を通し、視野が広がり、物事に対する考え方が変わったような気がします。これからは今までの自分を見直し、世界に目を向けて、国境を越えて人々に貢献しなければならぬと感じています。

最後に、このような機会を与えて下さった方々に心から感謝しています。ありがとうございました。

タイを訪れて

上 釜 理 沙

(加世田常潤高等学校2年)



私は、今回この事業に参加したことで、様々なことを学び、物事に対する考え方や、物の見方などが変わったように思います。

今回、2人の協力隊員の活動現場を見学しました。1人目の方は、タイの大学で日本語教師をしている園田さんでした。タイの学校では、先生に対して、絶対服従だということで、張り合いがないと園田さんは、おっしゃっていました。でも、園田さんの授業は、とても楽しそうでした。2人目の方は、養護学校で教えている上野さんでした。私が上野さんに、「何がたいへんですか。」と質問をしたら、すべてが大変という答えがかえってきました。その理由が、資金や、人材が不足していること、自分のしたいことを他の人達に伝えること、考え方が違うといったことなどでした。でも、私には、とても楽しそうにやっているようにしか見えなかったです。2人の隊員の方々は、とても輝いて見えて、うらやましく思いました。

タイの村でのホームステイでは、最初の儀式の時に、変な液体はかけられるし、手にひもを巻かれて、何なんだろうと思いました。ホームステイ先での1日目は、不安と戸惑いだけでした。まず言葉。みんな

やさしくて、近所の人達も来て、いろいろ話をしてくれるのに、何を言っているのかどう答えたいのかわからなくて、泣きたくなりました。家は、部屋が1つだけで、自分だけの時間がなかったり、お風呂、トイレもどうしていいかわからなくて、帰りたかったです。家族の人達や近所の人達が、やさしくゆっくり話してくれたり、身ぶり、手ぶりで教えてくれたり、本を使って、発音を教えながら話してくれましたが、タイ語を話すことのできない自分がいやになりました。ご飯の時も、食べ方などを教えてくれて、必ず「おいしい」と聞くので「おいしい」と答えると、どんどん、いろいろついてきて、そこまでしなくてもいいよというくらいやさしい人達でした。2日目ぐらいになると、タイの生活にすっかり慣れてしまったのか、水浴びも、気持ちよく感じました。

最初は、帰りたかったです。ホームステイでなければできない貴重な体験と、言葉が通じなくても、笑顔だけで心が通じること、自分から人にやさしくし、声をかけることなど、様々なことを学ぶことができ、私はもう少しいたいと思っていました。

この体験で、私は、新しい自分を見つけることができ、今後自分にできることを少しでもしていきえるようになりたいです。

タイの国で得たもの

西 佳 乃

(鹿児島中央高等学校1年)



私は、今年のこの体験事業に参加してよかったと思っています。私たちが今年訪れた国はタイで、異文化に触れ、日本人より豊かな心を持ったタイ人に接し、青年海外協力隊員の活動現場を見ることにより、多くの事を学んだからです。

タイで私が学んだ事のひとつは国際協力についてです。青年海外協力隊など全然とっていいほど関心のなかった私ですが、2名の協力隊員の活動の様子にとってもあこがれました。JICA訪問や隊員の方の話などで、開発途上国ではまだまだ援助を必要としている事を知り、私も何か役に立ちたい、ということを感じました。隊員の方は自分のやっていることに誇りをもっているように思えました。私も将来は誇りをもてるような仕事をしたいです。TVS(タイボランティア協会)ではボランティアの意義についても学び、ボランティアとは他人に自分が与えてあげるだけではなく、そうすることで自分の精神も強くするという事を知りました。私は、身近な範囲でもいいからボランティアをしたいです。

私が学んだ事に、大きな心を持ち、笑顔で相手に接するという事があります。村でのホームステイでは、言葉がほとんど通じなくて最初はとても苦労し

ました。けれども、私が何か話しかけようとする、笑顔で私の話を聞いてくれますし、私も笑顔でタイの人々と話をしました。私は人見知りをする事が多いのですが、笑顔のきれいなタイの人々には打ち解けることができました。タイの人々は、私に人への接し方を教えてくれました。村ではほかにもいろいろな体験をしました。日曜の朝、お寺でお供え物をするという行事に参加することにより、タイでの仏教に対する信仰心というものを感じることができました。また、水浴びやトイレなどは日本とまったく違ったもので、とても戸惑いました。この事はタイの生活の一部で、ごく普通におこなわれているという事で、またさらに異文化を感じました。

この事業に参加したことは、私の将来の進路選択をする際にとっても役立っていくことだろうと思います。これから生活していく中で、世界にも目を向けていきたいと思っています。最後に、いっしょにタイに行くことができた友達、またこの事業を支えてくださった方々、そして両親に感謝したいです。

夢さがしの旅

村方直己

(知覧中学校3年)



青年海外協力隊とは世界中の開発途上国に行き、ボランティアをする人達。ぼくは鹿児島県青少年国際協力体験事業という企画でタイに派遣される事になった。2回の研修を終えて、いざタイへ出発。だが不安はある。現地の人となじめるのか、生活習慣に合うだろうか、言葉は通じるのだろうか。そんな不安を抱えたままロブリー県のルンカーオという村に着いた。村人達はとても温かく出迎えてくれた。みんなの手に安全祈願のお守りをまいてくれた。

村の人達の優しさに触れることができ、不安は全て吹き飛んだ……かにみえたが、現実はきびしかった。ホストファミリーの家に着き自己紹介をした。相手の自己紹介も理解できた。どうやら言葉は心配なくファミリーともなじむ事ができた。3つあった不安が2つなくなった。一段落ついたところでお母さんが「アップ・ナム」(水浴び)と言うのでさっそく風呂にいった。風呂にいった。「なんだよこれ」ショックだった。でかい水がめと洗面器だけの部屋。蚊がたくさんいる。電灯が暗い。研修の時に聞いてはいたけど、まさかこれほどとは。風呂から上がりトイレへ行った。「紙がないじゃねーかよ。」これには本当に困った。寝る前に思った。「お父さん、お母さん、早く帰りたい。」

次の日、ロブリー市内の大学を訪れた。ここには協力隊員が日本語教師として派遣されている。その人が協力隊に入った理由は外国に興味があったからということだった。次の日には養護学校を訪れた。ここにも協力隊員が派遣されているのだが、協力隊に入った理由は、やはり外国に興味があったからだそうだ。僕だって外国に興味はある。でもこんな遠い所まで来てボランティアをしようと思った事は1度もない。日本を離れたいから。日本を離れ外国人のために自分のできる事でボランティア活動をしている隊員を見て僕はとても感動した。

村へ帰るとお別れパーティが始まった。僕はそのパーティで空手を披露した。これも一種の国際交流だと思う。その後も村中が1つになって踊りまくった。とても楽しい夜で一生忘れない。今日であの風呂も終わりだな。

ついにお別れの朝がきた。家族にお礼を言った時、涙があふれてきた。みんなも泣いていた。バスに乗った時「帰りたくない」と思った。あんなに帰りたがっていた僕だけど心の底では帰りたくない自分がいた。村のみんなに優しくしてもらって4日間楽しかった。

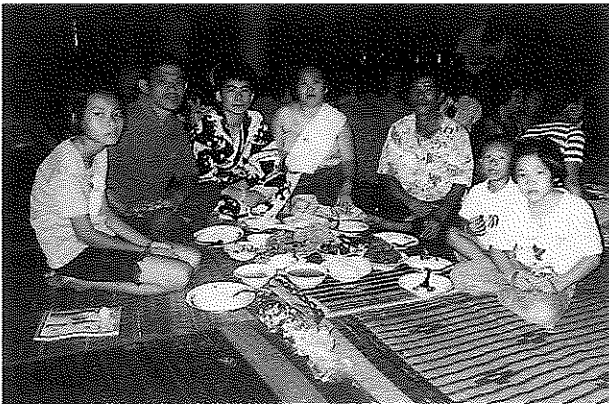
外国に行きたいという理由で始まった旅。これは協力隊の人も一緒だ。外国に行く勇気があればだれにでも国際協力はできるはず。ボランティアでだれかに優しくすれば、相手の人も優しくしてくれる。そういった交流を深めるのも国際協力の役割なのかもしれない。

これから僕は人間として国際協力を少しでもできるようにしたい。そしてもっとたくさんの人と出会いたい。

青少年国際協力体験事業に参加して

西野 健太郎

(知覧中学校3年)



僕は、最初この事業に参加しようとした目的ははっきりしていませんでした。協力隊の事も知りませんでした。父が、いい経験だから参加してもいいんじゃないかということで参加しました。でも外国で友達を作りたい、異文化を体験してみたいという思いがありました。

7月31日ホームステイ先のロブリー県ルンカーオ地区に入りました。タイの少数民族の1つ、プアン族の村で人口約3,000人、稲作中心の農村でした。僕のホームステイ先には、事前に日本語を勉強していたのか、少しだけ日本語を話せる人がいたのでとても幸運でした。お陰で、言葉に困ったりすることなどほとんどありませんでした。食事はスプーンを使って食べます。味は全体的に辛いものが多く、あまり余計には食べられませんでした。そんな僕に周りの人達は、「たくさん食べなさい。」と言ってくれて、また嬉しくなりました。でも、いい事ばかりではありませんでした。タイ語で「アップ・ナム」という水浴びが一番きつかったです。これは日本でいう、お風呂みたいなもので、溜めている冷たい水を体に浴びますが、それがとても冷たいのです。そしてトイレも溜めた水で、自分で流すようになってい

ました。しかしこれはタイの人達にとっては当たり前の事であって日常的なことなんだろうと改めて思いました。

ホームステイをしている間、大学で日本語教師をしている園田智子隊員、養護学校で音楽等を教えている上野未奈隊員の活動現場を訪れました。大学で僕は習字を書きました。みんなすごく興味深く見てくれました。学校案内を生徒達がしてくれることになり、団員1人に3～4人程がついて校内を回りました。園田隊員の生徒なので結構日本語が通じて、住所を教え合ったりして交流を深めました。園田隊員にタイでの苦勞などを尋ねてみると、やはり言葉が通じなかったことらしく、はじめは本当に嫌になったそうです。次に上野隊員のいる養護学校でも授業の見学をさせてもらいました。鍵盤ハーモニカを吹いたり、踊ったりしてとても楽しそうな授業でした。そんな上野隊員はとても輝いて見えました。実際に2人の協力隊員の話聞き、自分の意志で、日本から遠く離れたタイにやって来て、日々努力している姿を見ると、それまでまったく興味のなかった青年海外協力隊に大変興味を持つようになりました。

さよならパーティでは、それぞれ特技を披露したり、一言ずつ感想を述べたり、村の人達と写真を撮り合ったり、住所を教え合ったりしました。別れの日、家で朝食を食べた後、僕は掃除をしに部屋へ行きました。その時「これでお別れなんだ」と思った瞬間、涙が出てきて止まらなくなりました。昨夜までこんなことは予想もしていませんでした。ぐっと我慢して涙をタオルで拭き、もう泣かないと思って部屋を出ました。「ありがとうございました。」とタ

イ語で家の人達に言ったらまた涙が出てきました。そんな僕を見て家の人達も皆泣きだしました。

泣きながらも会話をし、集合場所のお寺まで行きました。村の人達は、僕や同行した13人全員にたくさんのお土産を渡してくれました。とても嬉しかったです。ずっと涙が止まらずにいました。僕は悲しくて堪えきれず誰よりも先にバスに乗りました。

数分後、バスは動きだしました。皆、外からバスへ、バスから外へ手を振っていました。別れてから1時間程僕はずっと黙っていました。誰とも話す気になれませんでした。僕は、最初この事業に参加した目的はほとんどありませんでした。でも、この

時はじめて参加してよかったと思いました。今回、この事業で青年海外協力隊員の苦労や、異文化の体験で多くのことを学ぶことができました。

将来、世界に目を向け活動する程の大きな事はできないかもしれませんが、この体験を生かし、もっと身近なところでボランティアをしてみようと思います。

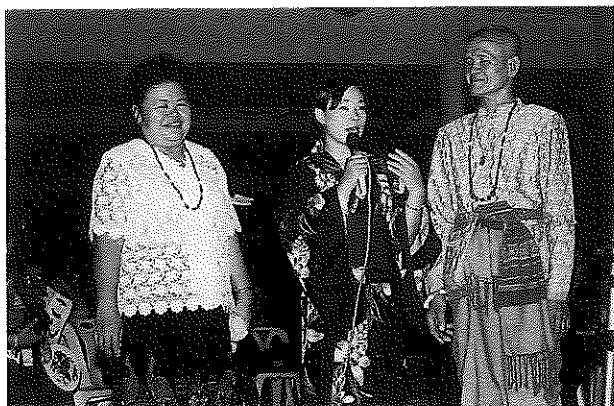
この事業に関わった多くの人達や、タイの人々に、心から感謝いたします。

「コープ クウン カップ」(ありがとうございました。)

タイでの体験日記

大迫恭美

(笠沙高等学校2年)



7月30日、私たち14人はタイを目指して出発した。私はずっと緊張していたのか飛行機の中で足が痛みはじめ、バンコクのホテルに着いてからゆっくりと足を伸ばして楽になった。

バスに乗りホームステイ先へ向かった。窓の外からタイの街並みを見ると、至るところに仏像が並んでいて、やはり仏教が生活に密着している国だということがわかった。

バスがようやくルンカーオ村に到着した。ここに4日間ホームステイするかと思うと不安がよぎり、日本へ帰りたいたいとも思った。でも村の人達は私たちを心から歓迎してくれた。村の中心部にあるお寺で私たちを受け入れる儀式などがあった。その時安全祈願の意味を込めて手首に白いひもをつけてくれた。その後ホストファミリーを紹介され、一緒にご飯を食べ、それぞれの自宅へと向かった。その時私は何を言えばいいんだろうとずっと考え、黙り込んでしまった。それもそのはず、言葉が通じないので、うまく会話ができないのだ。しかし村の人がゆっくりとしたタイ語と英語を混ぜて話しかけてくれた。日本はどんなところなのかとか学校の話をした。私もタイのことや家族のことをいろいろ聞き、話をし

ているうちに楽しくなってきた。

次の朝は日曜日で、村の人全員がお寺へお坊さんにお供えする料理を持って行った。私にはママさんがとてもきれいな民族衣装を着せてくれてとてもうれしかった。女性はお坊さんに触れてはいけないので、私たちはお坊さんから離れた所でお供えをし、お経を聞いた。

午後は村の産業を見学した。農業以外の現金収入の道として、ろうそく作りや籠作り、製めん、伝統の織物工場などである。

4日目の朝、私たちはロップリーのラチャパット大学へ行き、協力隊員の1人と出会った。その方は生徒に日本語を教えていてその授業を見学させてもらった。みんな日本語が上手で、丁寧に教えている先生もまた楽しそうに授業をしていた。私たちも授業に参加し生徒と日本語で会話した。授業のあと日本文化を紹介するために、習字を書いたり踊りを踊ったりした。タイの生徒もまた伝統舞踊を見せてくれた。それから生徒に学校内を案内してもらい食事をした。私は、なぜ日本語を習っているのかを尋ねた。すると1人が「私は日本へ行き、そこで仕事をしてタイで暮らす家族へお金を送り生活を助けるためです。」と答えてくれた。日本の大学生はこんなことを考えて大学には行っていないだろうと思った。

村に戻ると、お寺ではタイのお菓子をつくっていた。だんごを少し小さくしたものをココナッツミルクのスープで煮込み、卵を入れてできるもので、とても甘くておいしいものだった。次に村の子供たちとバレーボールやセパ・タクローをして楽しんだ。

日が経つにつれてそこでの暮らしにも慣れ、

すごく楽しく思えてきた。夜家に帰ると、近所に住んでいるおじさんたちが私にダンスを教えてくれた。曲に合わせて手を使い足踏みしながら、みんなで楽しく踊った。私は言葉ではなく心で相手と触れ合うことができることに気づいた。話ができなくても表情や手を使ってこんなにまで楽しくなれるもんだと思った。

5日目はタイの養護施設に行った。そこには、障害を持った約200名ほどの子供たちが籍を置いているが、実際には半分くらいしか来ていないようだ。貧しい家庭に生まれた子やその他様々な事情で来れないということだった。また、タイでは養護教育の取り組みが始まったばかりで、援助がまだまだ足りていないということだった。

養護学校での授業で、生徒たちはピアノをふいたり、曲に合わせて歌ったりと、その表情はとても明るいものだった。私たちも授業に参加してリコーダーをふいた。タイで人気の「ちびまる子」のテーマソングも演奏した。上野隊員の話によると、「毎日毎日がたいへんですが、子供たちの笑顔により救

われていますし、この仕事に誇りを持っています。」とのことだった。私も自分が将来そんな仕事に就いたら自信と誇りを持ちたいと思った。

養護学校から帰り着くと、お別れパーティでタイの人たちに食べてもらうおにぎりや吸い物をつくることになった。夜みんなで食事をする時その料理も並べられたが、ほとんど食べてもらえなくて悲しかった。そのうちパーティも盛り上がり、輪になって、タイダンスを踊ったが、ずっとこのまま続ければいいなあと考えた。

そしてお別れの朝が来た。バスが迎えに来て村の人たちに別れを告げた時、急に悲しくなり涙があふれた。本当に本当にいいところだった。ずっとそこにいたい、日本に帰りたくないくらいだった。お世話してくださった人たちもみんな泣いていた。

バスに乗り、しばらくは涙が止まらずバスの中は静かだった。タイという今まで見たことのない国を自分で見て、感じて、実際に体験してみて本当にいい経験をした。1週間という間だったが、いろいろなことを考えさせられた。

第8回鹿児島県青少年国際協力体験事業を終えて

団長 弓 場 秋 信

鹿児島空港国際線ターミナルでの結団式で、団員は2回の事前研修で学んだタイ語で自己紹介し、出発にあたっての抱負を述べた。それを聞きながら、この事業の目的に沿って十分な成果を上げるべく、精一杯の努力をする事を心に誓い機上の人となった。

飛行機の中では食事の時間以外はほとんど眠っていた団員も、バンコック空港に到着し、湿気を含んだ熱気に触れ、民族衣装をまとったジャスミンの花売娘の歓迎を受けるにつれ少しずつ目が開いていった。

バンコックでは、TVS（タイボランティア協会）を訪問し、日・タイ関係の歴史やボランティアについて話を聞き、世界文化遺産に指定されているアユタヤ遺跡を見学して、4泊5日のホームステイ先、ルンカーオ村へと向かった。

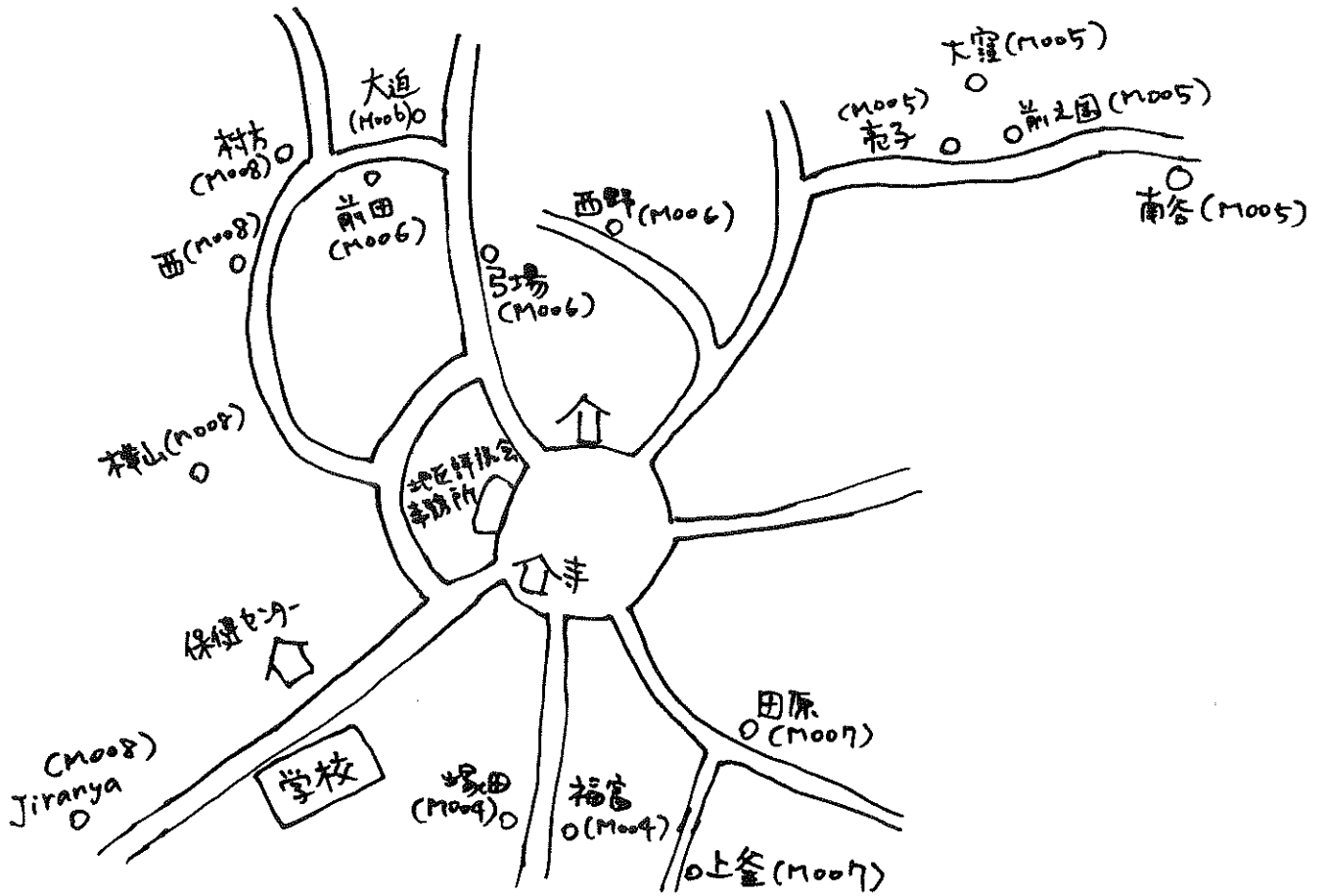
バンコックから北に約150kmのロッブリー県ルンカーオ村は、約200年前ラオスがタイとの戦争に敗れ、タイのラマ3世によってラオスから連れてこられたプアン族が住む人口約3,000人の稲作中心の農村で、ホームステイの受け入れは今回初めてである。それにもかかわらず村側の受け入れは完璧であった。村民は、自分達の生活・文化を見て欲しいと、中心に位置するお寺でのタンブン（徳を積む）、伝統料理、伝統行事（芸能）、村内産業を紹介した。そして子供達とのゲーム・スポーツ交流等、村民の心からの歓迎・もてなしを受けた。その中で団員は、タイ語に悪戦苦闘しながらの家族とのコミュニケーション、異なる生活環境や習慣への驚き、戸惑いを乗り越え、村の生活を受け入れ、徐々に村に溶け込んでいった。

ホームステイ中に、ロッブリー市内で青年海外協力隊員としてラチャパット大学で日本語を教えている園田隊員と、ロッブリー特別養護学校で養護教員をしている上野隊員の2名の鹿児島県出身者の活動現場を訪問した。ラチャパット大学では日本語を学ぶ学生と交流を持ち、そして養護学校でも日本の踊りなどを紹介した。団員は2名の隊員の授業風景を見学したり、話を聞いたりしていく中で、青年海外協力隊や国際協力を身近なものとしてとらえるようになり、自分の将来の選択肢の中に協力隊参加をあげる団員がいたり、国内外での活動を問わずボランティア活動について真剣に考える者も出てきた。

仏教を深く信仰し、自然と共に生きる事を大切に生活しているプアン族の人々に多くの事を学び、草の根の国際協力を悩み苦しみながらも少しずつ形にすべく輝きをはなっている二人の鹿児島オゴジョに刺激を受け、出発時のうつむき加減の表情が、何かを得た満足感に満ちた笑顔に変わり全員が無事に帰国した。

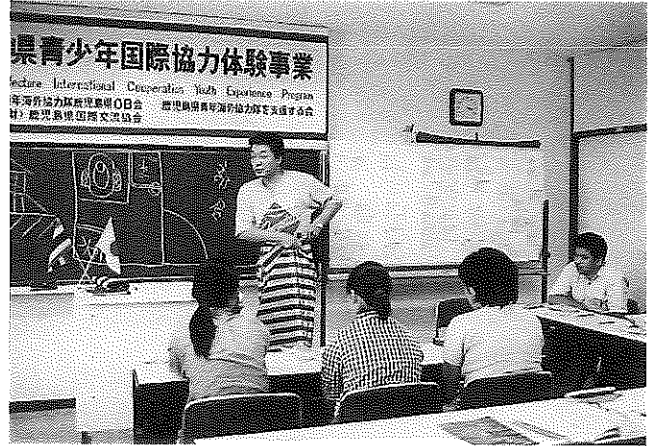
この体験が様々な形で将来生かされる事を希望し、村の皆様、TVSのスタッフ、そしてこの事業を支えて頂いた皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

ルンカーオ村ホームステイ先配置図





6月26日 “ワイ” と呼ばれる合掌の練習



7月10～11日 金峰町の南薩少年自然の家で
“特別講義”



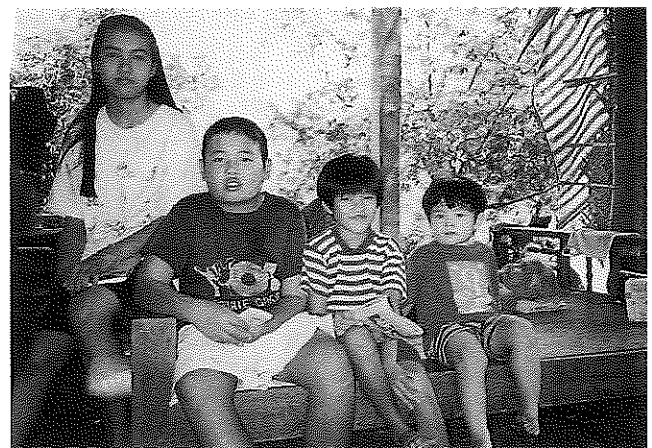
ルンカーオ村の安全祈願の儀式で
全員右手を出しているところ



小学校の朝の朝礼



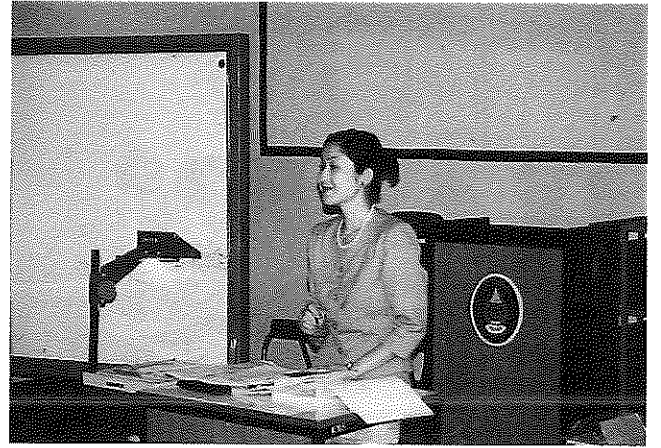
早朝のタンブン



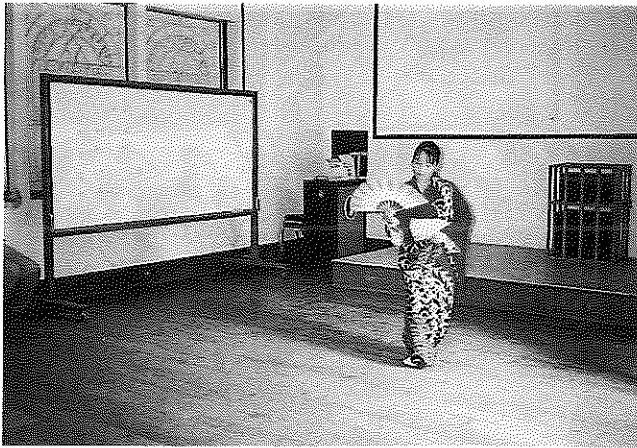
ホストファミリーと近所の子供たち



バスケットづくりに挑戦！



園田 隊員



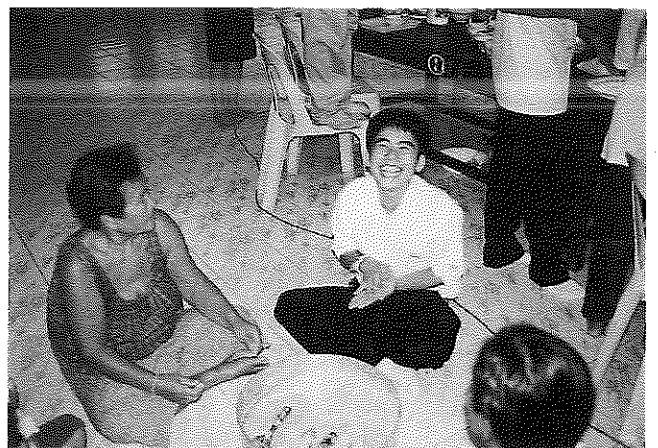
日本舞踊「舞春秋」を披露



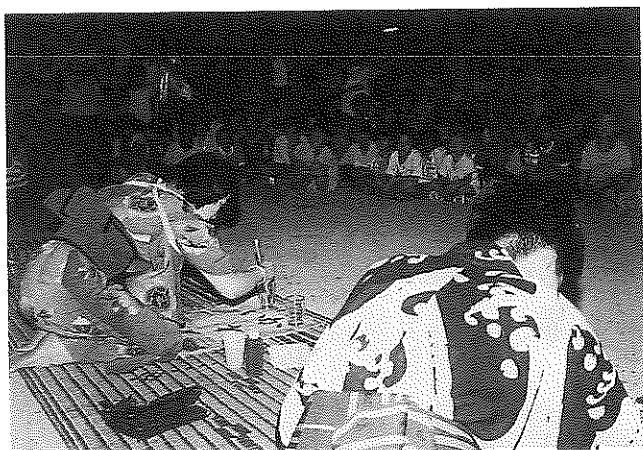
寄付金贈呈式。真ん中が上野隊員



“これなーんだ？”



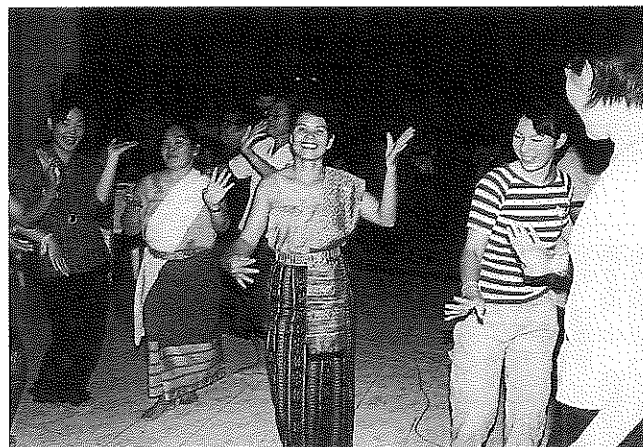
楽しいお菓子づくり



日本の文化を紹介



“あっ、あれおいしそう”



“みんなで踊りましょ”



タイ語で“お別れの歌”



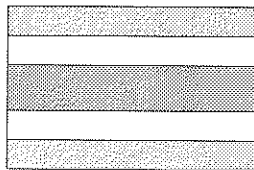
“記念に撮ってね”

わたしたちが覚えたタイ語

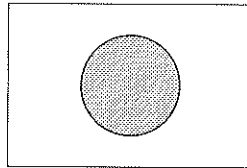
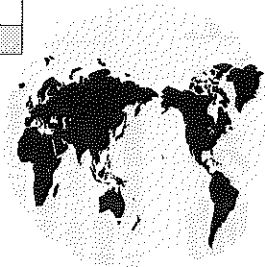
男性は語尾にクラブ、女性はカーをつける

サワッディー・クラブ(男)/カー(女)
 インディー・ティーダイ・ルーチャック・カー
 コップン・カー
 マイ・ペン・ライ・カー
 サバーイディー・ルー・カー
 サバーイ・ディー・カー
 コー・トー

おはようございます、こんにちは、こんばんは
 はじめまして、よろしくお願いします
 ありがとう
 どういたしまして、気にしない、大丈夫です
 ごきげんいかがですか
 元気です
 失礼します、ごめんなさい



赤 (民族の団結)
 白 (仏教)
 青 (国民)



ポム	ぼく
ディチャン	わたし
ラオ	私たち
チュー	名前
クン	あなた
クン・ポー	おとうさん
クン・メー	おかあさん
ポーメー	両親
ピーノーング	きょうだい

アロイ	おいしい
ペット	辛い
ワーン	甘い
チョーブ	好き
カーオ	ごはん、米
キン カーオ	食べる
イム レーオ	おなかいっぱいです
キン・ドゥーム	飲む
ポラリス	ミネラルウォーター

ワット	寺
ムーバーン	村
ギーブン	日本
ナクソクサーム	学生
アップ・ナーム	水浴び
ホン・ナーム	トイレ
サッパー	洗濯をする
サヌック	楽しい
ヤーク	難しい

フェアウェルパーティーで歌ったタイの歌

ラーゴーン	ブアン	ティ	ラック	(さようなら愛しい友よ)
ラーゴーン	ブアン	ティ	ラック	
ラーゴーン	ラーゴーン			(さようなら、さようなら)
ラオ	チャ	ポップ	カン	マイ
ラオ	チャ	ポップ	カン	マイ
ラーゴーン	ラーゴーン			

同行者一口メモ

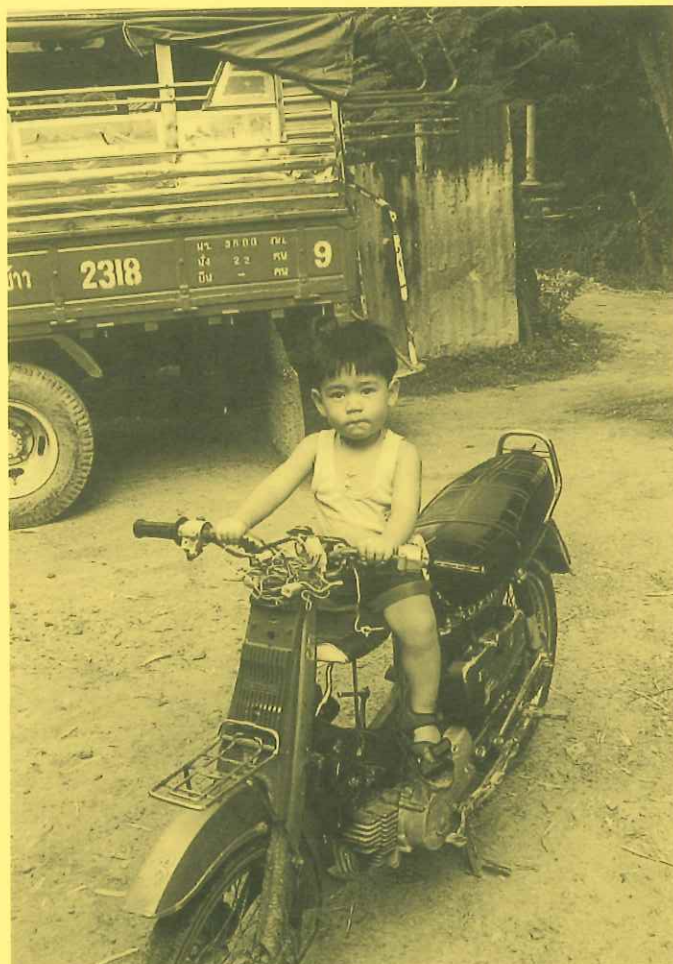
香港の空港で君らに初めて会ったとき正直少し不安でした。これからすごい体験ができるというのに表情は硬く、とてもおとなしく受け身な感じがしました。既に長旅で疲れ、緊張し、怪しい新聞記者を警戒していたのだろうけど「ん、大丈夫かな」と思った。そんな不安が吹っ飛んだのは三日目頃から。最初ブーブー文句言うばかりだった君たちが、異文化や新しい体験との出会いを悠々と楽しみ始めた。カメラをのぞいていて、表情が変わっていくのがよく分かった。帰る前日バンコクでみんなと話をしたとき、君たちがそれまで口にこそしなかったけど、いろんなことを考え、見ていたのに驚き、頼もしく感じました。うらやましいです。その年齢であんな経験ができて。忘れられない夏になるだろうけど、もうひとつ、君らの周りでその機会をつくり、支えた人たちのことも忘れないで。そしてその思いをその大人たちにでなく、君らの周りの人々へ。5年後、10年後、世界のどこかで、鹿児島地域の中で前を向いて生きる顔を再び取材する予感がしています。

(前田義人)

ぎゅっとなつまった七日間でした。事前研修ではみんな下を向いたまま、あんなに元気がなかったのに、村の中ではタイ語の本を片手に身振り手振りでそれぞれにコミュニケーションを図り、好奇心で目をきらきらさせているのです。うれしくなるとついカメラを回しすぎ、膨大なテープの量に頭を悩ます羽目になってしまいました。ルンカーオの村には、かつて日本にもあったであろうと思われる景色がたくさんありました。隣近所が行き来しあい、子供たちの様子を村の全ての大人が我が子のこゝろのように見守っています。少年による犯罪や非行なんて言う言葉は無縁の土地なのでしょう。鹿児島出身の隊員が生き生きと活動している様子に感動した子供たち、「自分は誰かのためになっているかなと生まれて初めて考えた」と話す最終日の夜、この経験は決して無駄になることはないと感じました。君たちの将来がとっても楽しみです。(樺山美喜子)

子供達の表情が変わりはじめたのはホームステイが始まってからでした。日本では見せてくれなかった“笑顔”を発見。さらに自主的に会話を求めていく彼らの変身ぶりに、驚きと安心とそして感動すら覚えました。異文化を素直に受け入れ、言葉は通じなくてもしっかりとコミュニケーションをとっている子供達を見てみると、6年前に行った協力隊の初期の時代を思い出しました。はじめての海外での生活は言葉がうまく通じず、自分の言いたいことが言えなかったりすることに苛立っていました。今回はタイ語などほとんど解からないままだったにもかかわらず、かなり気楽に行けたのは過去の経験で培った「何とかなるさ」のラテン系の楽天さだったと思います。タイでの生活は素朴そのものでした。日本では忘れかけているものがこの村には沢山ありました。その1つが家族の絆。信頼関係が強く、親の言うことを素直に聞く子供達も役割分担がしっかりしており、規律正しい生活が徹底していました。そして、本当に思いやりの心があります。見ず知らずの外国人を心から歓迎してくれました。この村に来てよかった、心からそう思いました。子供達だけでなく、大人にもこの経験はこれからの人生に影響を与えるものでした。是非多くの方々に参加してもらいたいです。最後に支援していただいた皆様に感謝すると共に、この事業の継続を心から願います。(塚田 拓)

村は歓迎ムード一色に包まれていた。コンサートツアーの舞台のように大きな音響装置が据えられていた。歓迎の儀式で安全祈願にと手首に巻いてもらった白いひも。わたしは行きの飛行機の中の機内食で、袖口にトマトソースをくっつけてしまっていたので、この白いひもが汚れてはたいへんと翌日にははずしてしまった。こうして無事帰って来られたのは他の団員のみなさんがずっとつけてくださったおかげであろう。今は通勤バッグのポケットの中に入れてある。村でのホームステイは、異文化に触れ、異文化に戸惑い、異文化に対するストレスとの闘いで始まった。1泊目わたしはほとんど眠れぬ夜を過ごした。現実を受け入れることができなかつた。しかし次第に子供たちは打ち解け、いつのまにか伸びやかに笑顔が輝いている。最初おとなしすぎて心配だった子供たちが見違えるように元気になり、はしゃいでいた。言葉の壁は厚いけれども、それぞれの国で営まれている日常生活にはいってみると、人の温かさは十分に伝わってくる。村を経つ時の子供たちの涙を見た時、彼らにとってこの村が去りがたい場所になっていることに感動を覚えた。今回のこの経験が自信になって、今後団員のみなさんがさらに輝いていくことを願わずにはいられない。(田原尚子)



Phob kan mai Lum Khaow !

第 8 回 鹿兒島県青少年国際協力体験事業報告書

編集発行 鹿兒島県青少年国際協力体験事業実行委員会

平成 11 年 10 月
